

【研究者インタビュー】 No.8 看護学研究科 長畑 多代 教授

引用	研究者インタビュー. 2019, 8
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017000

リポジトリ・オープンアクセス研究者インタビュー No.8

看護学研究科 長畑多代教授

2019年12月3日(火)

図書館ではリポジトリ、オープンアクセスについて広く知っていただくために、研究者インタビューを実施しています。今回は常にリポジトリダウンロードランキングの上位にある論文「[認知症高齢者をケアする看護師の感情](#)」(大阪府立大学看護学部紀要. 2006, 12(1), p.85-91)を執筆公開されている長畑先生にお話を伺いました。

図書館：

先生の研究分野について教えてください。

長畑先生：

老年看護学が担当で、認知症の看護を一つの柱にしています。もうひとつは、介護老人保健施設、特別養護老人ホームなど介護保険施設。病院でも在宅でもなく、施設の看護の実践を追究していくという中で、施設の中でもやはり認知症の方が8割9割になりますので、二つの軸でと言いながらも一つのよう二つのようなという状況です。

図書館：

2018年度リポジトリランキング7位になっている論文「[認知症高齢者をケアする看護師の感情](#)」の内容について教えてください。

長畑先生：

認知症の看護について、認知症の方のニーズや、看護技術を追究したいけれど、認知症の方を対象とする難しさ、インタビューが困難だったり、倫理的な問題もあって、ケアをしている専門職がどのような判断や考えで関わっているか、認知症の方の反応をどのように捉えているか、専門職の技術とは何か、などを探究したものです。

この論文は認知症高齢者をケアする看護師の感情ですが、児童虐待、精神科看護の中の思春期病棟のケア、そこに共通している、対象に対しての共感のしにくさや、知識がないとか専門性が足りないというだけでは解決できない感情などについて、看護職のサポートニーズがあるんじゃないかということが研究の発端になっています。

虐待事例に関わっている保健師さんや、思春期病棟の看護師にインタビューしているシリーズもののひとつです。



図書館：

この論文もそうですが、ジェンダー関連論文なども最近アクセス数やダウンロード数が増えて、リポジトリ登録論文も増えてきています。他人事じゃない、自分たちの問題として情報を手に入れたいという、一般の方が増えているように思います。

長畑先生：

おっしゃるように、認知症の方は増えてくると確実にわかっていますし平均寿命の伸びもあり年齢に

比例して罹患率は高まっていますので、「認知症」というキーワードが看護職や医療関係者だけでなく一般の人からも注目されている、ということでしょうね。

図書館：

リポジトリというのはオープンアクセスのためのひとつのツールですが、いろいろな学会誌などでも少しずつオープンアクセスが増えてきていると思います。先生ご自身はリポジトリの論文を使われたりしますか。

長畑先生：

そうですね。あまり利用するときに「リポジトリ」を意識はしていないのですが、オンライン化された学会誌の論文からたどっていったり、医中誌などの検索結果から利用することが多いですね。

図書館：

看護学関連のリポジトリ論文はとてよくダウンロードされています。CiNii や医中誌にリンクされているので、検索結果からアクセスできるということが大きい理由だと思います。

長畑先生：

そうですね、まず医中誌からのアクセスが多いでしょうね。

図書館：

看護学関連の人たちだけではなく一般の人も求めている情報については、オープンアクセスの論文が多ければ多いほど、情報入手できる量が増えるので、社会的な影響力も大きいと思います。リポジトリを開設した当初は、紀要論文が登録コンテンツの大きな割合をしめていたのですが、学術誌に掲載された著者最終稿を登録するという形で増えていくと、本学のリポジトリもより地域の方に貢献できるのではないかと考えています。学位論文もリポジトリの重要なコンテンツですので、是非またご協力をお願いします。

長畑先生：

看護の学位論文の場合、通常、授与された後に学術雑誌に掲載することが慣例です。長期履修の社会人院生の場合、時間的に事前準備ができずに、修了後に掲載までの時間がかかることはあるかもしれませんね。それでも1年から2年程度の猶予があれば、公開できるよう指導していきたいと思います。

図書館：

これからもリポジトリへの登録にご協力よろしくをお願いします。ありがとうございました。